



FD Annual Report 2020-2021

「FD Annual Report」発刊に寄せて

この度、「FD Annual Report」を刊行する運びとなり、ここに記念すべき創刊号を発刊することができました。これも偏にFDセミナーおよび講演を引き受けてくださった講師の先生方、FD委員をはじめ教職員の皆様のご理解とご協力の賜物と感謝いたします。

神戸学院大学の全学的なFD活動の起源は2000年度に本学の「授業改善」を目的として、受講態度、授業内容、授業環境などを問うものとして、「授業評価アンケート（現・授業アンケート）」の全学的実施にまで遡ります。2002年度にはFD委員会を設置し、名称変更しつつ、学部FD委員会、大学院FD委員会と機能分化して現在に至っています。基盤となる活動の多くは、教育開発センターが設置された2009年度から翌2010年度にかけて形成されており、2016年度に、教育開発グループが全学教育推進グループに改組されました。

本学ではFDを「本学の教育にかかわるすべての組織およびその構成員が、大学憲章にもとづく教育目標の達成を目指して行う、教育の質向上のための組織的で継続的な取り組み」と定義しています。これに従って、これまでに学士課程教育および大学院課程教育の三つのポリシーの制定、学士課程教育の三つのポリシーにもとづく教育課程改善の取り組み、ならびに学士課程教育の質的向上を目的とした教育方法の工夫改善の取り組みなど、継続的にさまざまな活動を行ってきました。2019年度にはFD・IR担当特任講師が着任し、一時期中断されていた「学生とFD委員との懇談会」がワークショップ形式で復活しました。2020年度、2021年度はコロナ禍で対面のFD活動が困難でありましたが、遠隔会議システムにより「ティーチング・ポートフォリオ（TP）」セミナーを新たに開催し、「TP実施要領」策定により全学的にTPの整備を推進する方針を打ち出しました。

こうした本学におけるFD活動状況の周知、新しい企画の案内、教職員の意見交換のきっかけづくりとすることを目的に2009年度以降、「FDニューズレター（現・全学教育通信）」を発行し、一時断続的とはなりながらも現在まで継続してきました。ただ、「FDニューズレター」では紙面の制約上、セミナー、ワークショップ等の詳細な内容、成果まではお伝えすることができず、FD活動の周知や広報に限定せざるを得ませんでした。この問題を解決すべく、この度、旧来のFDニューズレターのうちFD活動報告を機能分化させて、「FD Annual Report」として発刊することにしました。

「FD Annual Report」は全学教育推進グループが主体となって行ったFD活動の内容の詳細な記録およびその成果等をまとめたものです。本学のFD活動の検証に資する資料として、PDCAサイクルを回して教育活動の内部質保証を実効あるものにする上で機能することが期待されます。

最後になりましたが、「FD Annual Report」が本学の教育にかかわるすべての教職員の皆様の教育活動の改善にお役に立てるようになることを祈念して発刊のご挨拶といたします。

全学教育推進機構 機構長
春藤 久人

目次

◆ 2020年度新採用教員向け FD セミナー	P. 3
◆ コロナ禍で学生の学びをどうデザインし、実践するか	P. 4
◆ 2021年度新採用教員向け FD セミナー	P. 5
◆ 心に寄り添った授業のつくり方	P. 6
◆ 一歩ずつ始めるカリキュラム・アセスメント	P. 7
◆ ティーチングポートフォリオセミナー	P. 8
◆ データサイエンス教育 FD セミナー	P. 9
◆ オンライン授業の設計と BYOD の活用を考える	P. 10
◆ FD・IR 特任講師企画：ティーチングポートフォリオワークショップ	P. 11
◆ FD・IR 特任講師企画：FD・ライティング何でも相談室コラボイベント： 効果的なレポート課題の出し方	P. 12
◆ 編集後記	P. 13
◆ 執筆者の紹介	P. 14

2020年度 新採用教員向け FD セミナー

2020年
4月1日(水)
12:25 ~ 13:00

2020年度より、新採用教員のガイダンスにおいてFDセミナーの時間を設けていただき、新採用教員向けFDセミナーを開催することとした。本学に採用される教員はこれまでの経歴や教育歴も多様であり、一堂に会する新採用教員のガイダンスの場において本学のFDについての理解を求めることがその後の本学でのFDへの参加をいただく上で重要と考えたからである。2020年度はその初回として開催したが新採用教員24人の参加を得た。

講演そのものは新採用教員ガイダンスの時間を一部いただいて実施していることもあり、時間としては短いものであったが、神戸学院大学で求められる教員像を理解すること、神戸学院大学全学教育推進機構が提供するFD関連イベントについて理解すること、アクティブラーニングについて理解し、自分の授業で活用できる手法を選択することができる

ようになること、そしてアクティブラーニングの効果的な学習課題をつくることができるようになる「本質的な問い」という概念を理解し、自分の授業における本質的な問いとは何かを明らかにすることができることを目的として実施した。

中にはFDという言葉聞いたのはこのセミナーが初めてであるという教員もいらっしゃり、新採用教員のFDスキルの差を実感することもあったが、こうした新採用教員の一同に会する場をお借りし、新しく本学に採用される教員のFDへの関心度合い等を観察できることは、今後の本学で開催するFDイベントの企画運営をする立場として大変ありがたいことであると考えている。今後新採用教員のガイダンスを継続していきたいと考えているが、経年変化を観察する上でも基本的には同一内容にて実施したいと考えている。



コロナ禍で学生の学びを どうデザインし、実践するか

2021年
2月22日(月)
10:30~12:00

2021年最初のFDセミナーは関西大学の山田剛史教授をお招きし、「コロナ禍で学生の学びをどうデザインし、実践するか」というテーマで講演をいただいた。元々2020年度本学FDセミナーとして2回講演をお願いしていたが、新型コロナの影響もあり、2020年5月の開催は見送ることとなったため、この2021年2月のセミナーは大変待ち望まれた開催となった。またこのセミナーはポーアイ4大学合同FDセミナーとして開催され、本学の参加者60名に加え、学外から34名もの参加をいただくことができ、合計94名の参加があった。このことは、コロナ禍においても学生の学びに対して教員が真摯に向き合っていることを示しているといえるだろう。

講演では、大きく分けて新型コロナの影響を受けたニューノーマルの大学教育の在り方について、そしてシラバスに始まる授業デザインについてお話をいただいた。大学での授業は開始を5月以降に延期し、オンラインでの授業が実施されたことから、各大学で授業の実施方針に違いがあったこと、そしてこれまでの大学での授業を根底から見直すことになるオンライン・オンデマンド授業が始まったことにより、時間や空間の制約を超えることが可能となったことは、学生・教員双方にメリットもデメリットも両方をもたらしたことに触れられた。この講演の最中、Mentimeterを使って参加者の意見を集約する機会があり、実際に授業でも役立てることのできるツールを体感できたことも参加者にとっては大変よい機会となった。これまでで実際にこの1年間教員がオンライン授業を経験したことはポスト・コロナを見据えた大学教育を展開していく上で、大きな糧となったと総括できる時間でもあった。その上で改めて授業設計を見直す場として、シラバスに始まる授業デザインについてご講演をいただいた。ここでは、学生の「主体的な学びを促す」授業計画を設計することの重要性に始まり、シラバスの意義・実際の授業運営に至るまで幅広くお話し

ただいたが、日頃意識して授業設計を行っているつもりでも、この1年間に対面授業から離れたことで、ともすれば忘れてしまう可能性のある授業デザインについて今一度初心に立ち返る機会となった。

今回のFDセミナーでは、最後にブレイクアウトセッションとして参加者同士がいくつかのグループに分かれ、この1年間の経験や課題を共有することで、今後の自身の授業方針等を見直すことができたと同時に、大学の異なる教員間での授業運営における工夫や問題点等を知ることにより、自身の所属大学の特徴をも考えるきっかけとなったようだ。

本学のFD担当としてこのセミナーを企画運営して感じた課題として、FDに対する関心・授業運営に対する不安等を持っている先生方の声を聞く機会をより広げる必要性を感じたことが挙げられる。こうした外部講師のセミナーにより本学FDの在り方を再考する機会ともなった。

2021年度 新採用教員向け FD セミナー

2021年
4月1日(木)
12:25 ~ 13:00

2020年度より、新採用教員のガイダンスにおいてFDセミナーの時間を設けていただき、2021年度も同様に新採用教員向けFDセミナーを開催した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大が懸念される状況下ではあったが、感染状況が少し落ち着いていた時期であったこともあり、対面にて実施し、新採用教員12人の参加を得た。

講演そのものは昨年度同様、神戸学院大学で求められる教員像を理解すること、神戸学院大学全学教育推進機構が提供するFD関連イベントについて理解すること、アクティブラーニングについて理解し、自分の授業で活用できる手法を選択することができるようになること、そしてアクティブラーニングの効果的な学習課題をつくることのできる

ようになる「本質的な問い」という概念を理解し、自分の授業における本質的な問いとは何かを明らかにすることができることを目的として実施した。

今年度もFDという言葉聞いたのはこのセミナーが初めてであるという教員もいっしょに、やはりこうした新採用教員の一同に会する場をお借りし、新しく本学に採用される教員のFDへの関心度合い等を観察する必要性を感じた。特に新採用教員の中にはこれから本学で授業を行う上での不安をアンケートに記載する方もいたことから、こうした不安の一つひとつ拾い上げて、今後のFD活動に還元する必要があると考えている。そうした意味でもこの新採用教員向けFDセミナーを次年度以降も継続し、教員のニーズの把握に努めたい。



心に寄り添った授業のつくり方

2021年
4月22日(木)
11:15~12:45
7月26日(月)
10:45~12:15

2021年度最初のセミナーは高知大学大学教育創造センターの杉田郁代准教授をお招きし、「心に寄り添った授業のつくり方」というテーマで講演をいただいた。2020年度の大学での授業は新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、急遽オンライン授業が開始され、一年間新型コロナウイルス感染症の感染状況に振り回されながらも、オンライン授業が定着した。しかしながら学生との対面での授業がなくなり、画面越しでは学生の心の状態を正確に把握することが難しくなり、学生の精神的疲弊に配慮が求められるようになってきたことを踏まえて、2021年度最初のセミナーとしては学生の心に寄り添う授業をどのように設計するのか、ということテーマとして講演いただくこととした。大学教員は授業という場で学生ともっとも身近に触れる存在であり、自分から声を上げて助けを求めることができない学生に気づき、また学生自身も自覚していない心の状態にいち早く気付いて声をかけることのできる存在であることから、教員一人ひとりがその自覚を持って授業に臨んでほしいとの思いから企画したものである。このセミナーには本学の参加者が教職員合わせて51名と多くの参加をいただくことができ、教員側にとっても学生の心のケアは関心事であったといえるだろう。

講演では、学生の授業にかかわる不安を教員が正確に理解できるようになり、学生の不安を提言させる方法を理解できることを目的として自己の授業形態にあった学生の心に寄り添った授業のつくり方の検討方法を説明いただいた。特に学生の授業へのモチベーションを向上させる取り組みを考えミニッツペーパーや同期型オンラインツールの使用、そしてどんな質問に対しても丁寧に答えることを繰り返し伝えることで相談の障壁を取っ払う必要があることも説明いただいた。

7月26日にも同一内容でご講演をいただき、その際には本学の教職員、非常勤講師合わせて46名の参加をいただいた。こちらの講演では新型コロナ

ウイルス感染症の感染が少し落ち着きつつある時期でもあったことから、「心に寄り添った授業のつくり方—ハイブリッド型授業・オンデマンド型授業における主体的な学び—」と一部内容を変更し今後のハイブリッド型授業の在り方を含めた検討ができるよう、工夫をいただいた。特に遠隔授業の要件としては授業の双方向性の担保が不可欠であるとした上で、単なる配信授業にしてしまった場合には90分という時間は長すぎるため、90分授業の構成として、学生が資料を読んだ上で小テストを受講し、模範解答で復習した上で掲示板を使って他の学生の意見を読む、といったように学生が自ら学び、かつその学びを他の学生との間で意見交換できる工夫が大切であることをご説明いただいた。

今回学生のメンタルケアを主軸において授業を設計するという事について講演をいただいたことにより、授業1コマで学生に単に知識を伝えるだけではなく、学生と身近に触れる存在として学生に目を向けることの重要性を教員一人ひとりにお伝えいただいたことは、今後オンライン授業においても、対面授業においても教員が担う役割の重要性が、参加教員に伝わったことと感じた。

一歩ずつ始める カリキュラム・アセスメント

2021年
6月3日(木)
15:30~17:00

2021年6月3日のFDセミナーでは、愛媛大学教育・学生支援機構より竹中喜一講師をお招きし、「一歩ずつ始めるカリキュラム・アセスメント」というテーマで講演をいただいた。このセミナーには本学の教職員合わせて78名の参加があり、カリキュラム・アセスメントが関心事であることがわかる。

講演では、「一歩ずつ始める」と題されたようにカリキュラム・アセスメントについて、その意義と課題、計画、実践方法、そして向き合い方と大変丁寧な説明をいただいた。時にカリキュラム・アセスメントは大学運営上の必要性に基づいて行われがちなどころがあるが、アセスメントにより必修科目と選択科目の区分変更や科目の新設や廃止といったカリキュラムそのもの、そして難易度の調整や教え方の改善、成績評価の見直しといった個々の科目の内容、そして支援対象の絞り込みや支援内容の検討といった学修支援の在り方そのものまで幅広くかかわっているものであり、これらすべてが学習成果の向上につながっているとした上で、カリキュラム・アセスメントの重要性をわかりやすく説明いただいた。その上で、カリキュラム・アセスメントはアセスメント担当の教員だけでなく、個々の教員にとっても読み手、担い手、つくり手としての立ち位置が求められていることを説明いただいた。特に三つのポリシーや各種データの理解を助け、かつ日常的な学生の観察や対話を通じたアセスメントに資する情報の提供、その上で全学レベルや学部レベルでのアセスメント結果に対する意見や論点を提示するという意味での読み手としての立場をきちんと理解しておく必要があるとのことであった。また、カリキュラムには多様な構成要素があることからその時々に応じて最適解を考えていく根幹としてカリキュラム・アセスメントを捉えることが必要ということについては、カリキュラムには唯一解はないということを教員に再認識を促したところだろう。

セミナーのまとめとして、カリキュラム・アセスメントには教育改善と説明責任の二つの目的があり、目標設定、情報収集、改善取り組みといった三つのステップがあること、カリキュラム・アセスメントに対して個々の教員が役割を理解した上で学修成果のデータや評価方法を意識しながら科目を担当することが、卒業時の学習成果の保証につながることを改めて説明いただいたことで、教員一人ひとりがカリキュラム・アセスメントとどのように向き合うべきか、を指針として提示いただいたと感じた。

本学のFD担当としてこのセミナーを企画運営して、本学でも今後カリキュラム・アセスメントが実施される上で、担当教員だけでなく個々の教員がカリキュラム・アセスメントと向き合う際に各々の役割を認識することの必要性を感じ、改めてこうした外部講師のセミナーにより今後のカリキュラム・アセスメントの進め方を再考する機会ともなった。

ティーチングポートフォリオセミナー

2021年
8月23日(月)
25日(水)
27日(金)

2021年度の試みとして、本学へのティーチングポートフォリオ導入を目指し、本学教員にティーチングポートフォリオに触れる機会を増やすことを目的として、小規模ではあるが実際に三日間かけてティーチングポートフォリオを書くセミナーを実施した。実際にメンターとしてティーチングポ

ートフォリオの指導ができる立場がFDを担当している私のみであったことも踏まえ、初回は5人の参加をいただき、ミニセミナーと実践を繰り返すことで、個々の進捗状況に寄り添いながら完成までをサポートした。

	8月23日	8月25日	8月27日
10:00～10:30	開会式・概要説明	個別フィードバック	個別フィードバック (TP修正含む)
10:30～11:00	教育の責任とは		
11:00～12:00	メンタリング1	教育の成果とは	昼休み兼課題作成
12:00～13:30	昼休み兼課題作成	昼休み兼課題作成	
13:30～14:00	教育の理念とは	教育の改善とは	
14:00～15:00	メンタリング2	メンタリング4	発表 (TP修正含む)
15:00～15:30	休憩	休憩	休憩
15:30～16:00	教育の方法とは	将来の目標とは	修了式
16:00～17:00	メンタリング3	メンタリング5	

三日間のスケジュールとしては上記表の通りであり、8月23日から三日間、朝10時から夕方17時までティーチングポートフォリオの作成にかかりきりになるハードスケジュールであった。参加前には事前課題の提出もお願いし、その事前課題をもって各教員の現在の教育活動を把握しながら私自身セミナーの進め方を検討し、当日に臨んだ。特にティーチングポートフォリオの作成過程は、実際自身のこれまでの教育活動を振り返り、自身の教育の理念を昇華すると同時に、今後の教育活動にどのようなつながるのか、という教育者としての振り返りの場でもあることから、とてもタイトなスケジュール感であったことと思う。しかし参加者の方々は皆、遅くまで課題に向き合い、時には翌日になっても課題に取り組み、一つひとつのティーチングポートフォリオの要素を書き上げてくださった。また個別フィードバックの時間にはティーチングポートフォリオの書き方や構成要素そのものへのアドバイスやコメントをさせていただいたが、他方で参加者の先生方から個々の授業での困りごとや自身の教育への思いなどをお聞かせいただくことができ、私自身大変勉強になった。

最終日には各自書き上げたティーチングポートフォリオを踏まえて、ティーチングポートフォリオの中身を使いながら個々の教育活動について発表いただき、各自のティーチングポートフォリオの共有を行うことで、最終修正を行うことができた。また修了式では修了証を授与し、この1週間の参加者の皆様の健闘を称えることができた。

今回小規模ながらもティーチングポートフォリオ作成のセミナーを開催することができ、実際には個々の書き上げたティーチングポートフォリオの各要素をお休み日として設定していた火曜日と木曜日に添削させていただき、フィードバックするという過程そのものは大変なものではあったが、その過程で私自身も参加いただいた先生方の授業方法を学び、理念に共感することができ、メンターである私自身の学びにもつながる機会であったと考えている。今後本学へティーチングポートフォリオを導入する上で、毎年このように小人数制でティーチングポートフォリオを短期間で仕上げるセミナーを開催し、本学教員がティーチングポートフォリオに触れる機会を増やすと同時に、私自身先生方の授業に対する想いを学びたいと感じた。

データサイエンス教育 FD セミナー

2021年
9月30日(木)
15:00~17:00

近年、高等教育においても新たな時代のリテラシー（読み・書き・算盤）の一つとして、「データサイエンス教育」の必要性が叫ばれるようになった。本セミナーは社会におけるデータサイエンス・AIの利活用や最新の動向、個人情報や倫理、データやAIを扱う上での留意事項など、広範的な内容を取り上げ、参加者にとっての「データサイエンス入門」の機会となった。

講演は2部に分かれ、まず羽森茂之先生より「データサイエンスの動向」と題して、その歴史から現代における必要性、更には具体的なデータ分析の手法とその要点についてご講演を賜った。特記すべきは「数字はうそをつかないが、うそつきは数字を使う」（アンソニー・ルーベン 2019）との引用と、「『データ出羽守（でわのかみ）』になってはいけない」とのご指摘をなされたことである。どのようなデータをどのような文脈で用いるのかにはセオリーがあり、それを逸脱すると誤った解釈がなされるし、それを意図的に助長することすらできてしまうことへの示唆であった。その後、相関関係と因果関係の違いやその背景に潜む交絡変数の存在、因果推論の方法や社会科学のデータにおける実験の在り方などについて講義いただき、データの読み方や分析の設計方法についての知見が提供された。

次いで、小川賢先生より「情報の取り扱い」と題して、データサイエンスの発展により高度化する情報セキュリティに関する話題を中心とした講演をいただいた。導入の一つとして「自動運転中の車が事故を起こした場合の責任の所在は誰にあるのか？」という具体的な問題を取り上げ、技術の進歩に法整備が追い付いていないことをご指摘された。

その後、個人情報を保護しつつこれを適切に利用するための情報加工の方法や、欧州の厳格な個人情報保護規則である「GDPR」に触れられ、国内外の状況の差について知見が提供された。また情報セキュリティにおいては、「機密性・完全性・可用性」の観点からの「情報の格付け」が欠かせないことに加えて、情報を守る具体的な方法である「k-匿名化」や「暗号化」について詳細が説明された。

講演後の質疑応答では「学生をデータ出羽守にしないためにはリテラシーの学習だけでは難しいと感じるので、授業の工夫をご教示いただきたい」との質問があり、羽森先生からは「学生に企業の実データに触れさせることで課題解決を通じて幅広く学習することができる。机上の勉強だけで力を養うのは難しい」、また小川先生からは「情報倫理は決して『楽しい』ものではない。学生には具体的な事例を取り上げながら興味関心を持たせることが肝要」とそれぞれ回答された。

二つの講演を通じての所感は、データサイエンスの発展とともに、そのすべての利用者がまた適切なリテラシーを有する必要性が問われているということである。これは情報保護の実務上においても同様であろう。その観点では、実のところデータサイエンス教育正否を規定するのは「教職員の情報リテラシーレベル」であるといっても過言ではないのかもしれない。

末尾となったが、本セミナーの開催については、神戸大学に共催いただき、また同数理工学・データサイエンスセンターに後援を賜った。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

◆登壇者

神戸大学大学院 経済学研究科 経済学専攻 教授 羽森 茂之 氏
神戸学院大学 経営学部 教授 小川 賢 氏

◆参加者数

学内教職員：67名（非常勤講師含む）
学外関係者：15名
合計：82名

オンライン授業の設計と BYODの活用を考える

2021年
11月2日(火)
11:00~12:30

2021年の大学コンソーシアムひょうご神戸主催FD・SDトップセミナーでは、関西大学の岩崎千晶准教授をお招きし、「オンライン授業の設計とBYODの活用を考える」というテーマで講演をいただいた。このセミナーには本学の参加者42名に加え、学外から19名もの参加をいただくことができ、合計61名の参加があった。コロナ禍においてある程度オンライン授業が浸透したものの、教員にとってアフターコロナのBYODを考える機会を期待されていたことがわかる。

講演では、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、2020年度急遽始まった大学でのオンライン授業はコロナ禍で定着し、質の高いオンライン授業が提供されるようになりつつあることに触れた上で、対面授業でもオンライン授業でも授業設計そのものは基本的には同じである一方、授業方法や学生のケアという点においては配慮が必要であることを説明いただいた。またこの2年の蓄積により、一口にオンライン授業といってもいくつかの種類に分けることができ、リアルタイム型やオンデマンド型、そして対面とオンラインとを組み合わせたハイブリッド型と多様な授業形態に分化してきたこと、その上でリアルタイム型には学生にとってプレゼンス（いま、ここにいるという存在感）が保てることで学びにむかう姿勢が形成されやすい一方、安心して授業に参加できる環境が必要であること、そのためには講義後グループで意見交換する際などにアイスブレイクの実施、撮影や録画禁止の徹底、活動そのものの可視化が重要であることを説明いただいた。また授業の配信型のオンデマンド授業においては、教員が授業設計の際に90分の1コマが終わったときに学生にどういう力が身につけばよいのかを考え、学生に伝える努力が不可欠であること、その上で対面型授業よりもよりスモールステップで目標を達成できるように工夫し、単に長い動画を配信するだけでなく、20分程度で一時停止して学習活動を挟むように工夫をすることが

求められるとの説明を受けた。

またセミナーの後半にはBYODの導入について、岩崎先生がご所属されている関西大学の事例を踏まえて説明いただき、BYODの導入によって掲示板等で授業内容の振り返りや次の授業への動機付けを行ったり、学生同士による問題作成やノート作成、そしてそれらの共有といった使い方をすることで、「教え」から「学び」へのパラダイムシフトが可能となることを説明いただいた。

本学のFD担当としてこのセミナーを企画運営して感じた課題として、本学でもこの2年間新型コロナウイルス感染症感染拡大の状況に応じて、オンライン授業を実施してきたが、それらを総括して教員がアフターコロナのBYODの在り方、またその環境下での授業設計について一度振り返りを行う機会を持つ必要性を感じたことが挙げられる。こうした外部講師のセミナーにより今後の本学BYODの在り方を再考する機会ともなった。

ティーチングポートフォリオ ワークショップ


2021年
9月14日(火)
9:30~11:00

2021年度8月に引き続き、本学へのティーチングポートフォリオ導入を目指し、本学教員にティーチングポートフォリオに触れる機会を増やすことを目的として、9月4日にティーチングポートフォリオワークショップを開催した。このワークショップでは、参加人数は3名と少なかったが、今後本学へティーチングポートフォリオを導入するにあたって、ティーチングポートフォリオへのハードル

を下げ、この作成過程が教員のこれまでの教育を振り返るよい機会になることをお伝えすることをメインとして開催した。

今後こうしたティーチングポートフォリオワークショップを年間数回開催し、関心を持ったタイミングで本学教員が参加しやすい環境を整えることによって、本学へのティーチングポートフォリオの導入をスムーズに進めたいと考えている。

ティーチング・ポートフォリオ (TP) と PDCAサイクル



ティーチング・ポートフォリオは、PDCAサイクルにおける「P」を担う。
 P: TP作成・課題発見
 D: 授業実施
 C: アンケート結果
 A: 改善案を考える
 P: TP見直し
 →TPを書いてみると
 「自分が何をどう教えているか」
 「その効果は現れているか」
 「どこに問題があるか」
 「どうすれば問題解決できるか」
 を考えることができる。

自身の教育・研究活動以外に どのようなことをしていますか

こういった活動を行うことが、授業にどのような影響を及ぼしているか、考えておいてください。

- ▶ 学内委員は担当されていますか？
- ▶ その他学内で担当している業務はありますか？

教育の責任は組織にあると思いますか それとも教員個人にあると思いますか

「キーワード」だけでも答えられますか？

- ▶ 神戸学院大学の建学の精神をお答えください。
- ▶ 神戸学院大学が期待する教育職員像を思い出してみましょう。

教育の責任は組織にあると思いますか それとも教員個人にあると思いますか

0:100じゃない場合は、割合を示してくださいね！

- ▶ 「組織」は教育の責任とどのような関係にありますか？
- ▶ 先生ご自身は「教育の責任」がどちらにあると思いますか？

FD・ライティング何でも相談室コラボイベント： 効果的なレポート課題の 出し方

2021年
10月19日(火)
13:00～13:40
12月21日(火)
13:00～13:40

2021年本学FDの新しい取り組みとして、学内の他組織とのコラボレーションを行い、よりFD参加へのハードルを下げると同時に、学内でのニーズに応じたイベントを小規模に企画するという試みを始めた。その第一弾として、10月19日および12月21日に昼休み時間帯を利用し、共通教育センターの岡村裕美准教授のご協力をいただき、FD・ライティングなんでも相談室コラボイベント「効果的なレポート課題の出し方」というミニセミナーを開催した。この開催に当たっては、8月末に実施したティーチングポートフォリオセミナーへご参加いただいていた岡村先生から、学内組織であるライティングなんでも相談室の認知度に課題があるというお話をお聞きし、それならFDとのコラボイベントを企画することで、学内教員に認知してもらおうというお話になったことからその開催を決定したという経緯があった。10月19日には本学専任教員および非常勤教員より17名、12月21日には同一内容だったにも関わらず6名の参加をいただいた。

セミナーでは、学生のレポートが語尾に問題があったり、段落や章構成ができていなかったり、そもそもレポートではなく感想文になっていたり、教員が期待していたものとは異なるレベルや内容のものが提出されるケースに触れた上で、そうしたレポートが提出される背景に、教員自身が学生に対して課題の出し方や指示の出し方を工夫することによって、改善できないか、ということテーマとしてお話をいただいた。本学の学生の多くは大変まじめであり、課題に対しても真摯に向き合っており、取り組む一方で、そもそも学生のライティングスキルのレベルを教員がきちんと把握して指示を与えることが大切であること、学生の「きちんと」書こうという意思を尊重し、どういうレポートを求めているのか、という点について学生と教員間で共有の機会を持つことの重要性を説明いただいた。その上で最後に本学のライティングなんでも相談

室の活用方法についても説明いただき、これから担当する学生への周知、また教員自身が相談室の存在を知り、活用を学生に促すことの重要性についても説明いただけたことは今後教員がレポート課題のみならず、ライティングスキルを要する課題を課す際に有益な情報であった。

本学のFD担当としてこのセミナーを企画運営して感じたこととして、これまで年間に数回のFDイベントを実施しているものの日程や内容によって参加へのハードルが高かったことから、こうした学内組織とのコラボレーションを利用し、またお昼休みにランチをしながらオンラインで受講するというスタイルによってFDイベントへの参加をしやすくする取り組みが求められていることを実感し、今後更に学内の多くのニーズを踏まえて展開していきたいと感じた。

編集後記

この度大変うれしいことに、FD Annual Report を発刊できる運びとなりました。神戸学院大学全学教育推進機構に着任してから丸三年が経ち、四回目の桜が舞う季節、着任してからのFD イベントを思い返しなが、本当に神戸学院大学はFD が盛んな大学だな、そんな大学でFD・IR 担当特任講師として勤務できることを幸せに思う日々だったなとFD Annual Report の編集作業を行いながら考えておりました。

2019年に全学教育推進機構に着任した際、右も左もわからない中、FDの推進だけを考えてイベントを企画・運営する過程で、本学にはFD News LetterはあるけれどもFD Annual Reportはないことに疑問を抱くと同時に、これほどFDのイベントを熱心に行っていて、かつ先生方の参加も100%を達成している本学のFD事情を広く公開できる方法があればいいなあ、と思うようになりました。2020年になり、本学のみならず全国の大学が新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、高等教育のオンライン化が進み、大学の在り方が問われる中で、感染症の拡大傾向を睨みながらも学生に授業を届けようとする先生方の姿を見ながら、新型コロナウイルス感染症に振り回される高等教育という未曾有の状況下で行われるFDイベントの実施状況を記録として残しておくべきではないか、と考、今回のFD Annual Report 発刊へと至りました。

改めて2019年度着任当時FD News Letterの着任のご挨拶として書いたものを見返してみると、「大切なことは先生方の貴重なお時間をいただいて研修に参加していただくわけですから、『有意義であること』に加えて『楽しんでもらうこと』が必要になってくるように思います」ということを書いておりました。このFD Annual Reportの編集過程を通して、この2年間のFDイベントを本学の先生方、またイベントに参加いただいた他大学の先生方に楽しんでもらえたのだろうか、と振り返る機会にもなったように感じます。私自身ティーチングポートフォリオセミナーを開催する中で、参加いただいた先生方の生の声に触れながら、共に楽しむFDイベントを実感できたことに喜びを感じたことも懐かしく思い出すことができ、今後のFDイベント企画に更に邁進したいと思っております。

今後は年1回の発刊を目指し、本学全学教育推進機構主催のFDイベントの開催状況を振り返ることができる有意義なFD Annual Reportとして公開していけるよう、努力したいと考えています。またこのFD Annual Reportがこれから先、本学に新採用教員として着任された先生方が本学のFD開催状況を知るための一助となることを願っています。

2022年度も本学の先生方にとって有意義なFDイベントを企画・運営していきたいと考えておりますので、今後とも本学のFD推進にお力添えいただけますよう、改めてお願いするとともに、これまでのFD活動への参加に感謝の気持ちを込めまして、編集後記とさせていただきます。

全学教育推進機構 FD・IR 担当 特任講師
川内 亜希子

執筆者の紹介

- ◆ P. 3～P. 8、P. 10～P. 12
全学教育推進機構 FD・IR 担当 特任講師：川内 亜希子（かわうち あきこ）
- ◆ P. 9
全学教育推進機構室 全学教育推進グループ

神戸学院大学 FD Annual Report 2020 – 2021

2022年5月23日 発行

発行人 神戸学院大学 全学教育推進機構
〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518
電話 078 - 974 - 1551(代)

印刷所 株式会社七旺社
〒653-0012 神戸市長田区二番町4丁目27
電話 078 - 575 - 5212(代)
